

祭2016』『第15回 東京JAZZ』『年越しラジオマンジャック』『しりすぎてるうた“パープル・レインのすべて”』『新春民謡列島2017』などを放送し、クラシックファン、ポップスファンなどの幅広い期待に応えた。

(6) 国際共同制作の推進

世界各地の音楽祭やオペラハウスでの公演を、各国の放送局・プロダクションとの共同制作により、水準の高いソフトを低コストで効率的に収録し放送した。16年度はミラノ・スカラ座やバイエルン国立歌劇場、チューリヒ歌劇場など世界一流の劇場でのオペラやバレエの公演、ザルツブルク音楽祭やバイロイト音楽祭などのフェスティバルのほか「五嶋みどり バッハを奏でる」を放送のために制作、「2016セイジ・オザワ 松本フェスティバル」ではNHKが制作主体となり国内での国際共同制作も実施するなど、合計12本の国際共同制作を行った。また、海外からの番組購入も積極的に行い、マルチユースすることで大型のクラシックソフトを安価で安定的に入手し、効果的に編成・放送した。

番組制作の委託

1. 関連団体等への番組制作委託

NHKは、質の高い放送番組の安定的確保を図るとともに、外部の専門的能力を効果的に活用することで、番組の一層の多様化を推進する視点から、関連団体へ番組制作委託を行っている。

16年度も、NHKエンタープライズ・NHKエデュケーショナル・NHKグローバルメディアサービスに、大型企画をはじめ各分野の番組制作を委託、NHKサービスセンターに広報番組の制作を委託、NHKプラネットに全国放送および地域放送番組の制作を委託、日本国際放送に国際放送番組の制作業務を委託した。

また、NHKでは、多様な番組を送り続けるために、関連団体を通じて番組制作会社への番組制作委託も行っており、外部のさまざまな制作パワーを効率的に活用している。

16年度の主な番組制作会社への制作委託

○地上波

総合では、『総合診療医 ドクターG』『木曜時代劇』、Eテレでは『ETV特集』『Eテレ0655・2355』などを制作・放送した。

○衛星波

BS1では、『ドキュメンタリー-WAVE』『チャリダー★快汗! サイクルクリニック』、BSプレミアムでは、『あてなよる』『晴れ、ときどきファーム!』などを制作・放送した。

2. 番組制作会社への直接委託（外部制作委託・本体）

番組制作会社が、関連団体を經由することなく、直接編成部門に提案する窓口として、06年6月に編成局内にソフト開発センターが設立され、12年6月からは組織改正に伴いコンテンツ開発センターがその窓口になった。特集番組や新番組の提案について、NHK、NHKの関連団体、それに番組制作会社の3者が、番組の企画提案や制作・演出手法を競い合うことで、より高品質、効率的、多様な放送番組を創造することを目的としている。

16年度は、「企画競争」として1年間で6回の募集を行った。テーマや期間を決めず通年募集している企画競争を含めると、参加した番組制作会社は17年3月末現在で、延べ297社で、685件の企画が寄せられた。企画競争から生まれた番組としては、『総合診療医 ドクターG』(G, 水)、『ドラマ10』『水族館ガール』(G, 金)、『プレミアムドラマ』『奇跡の人』『受験のシンデレラ』『隠れ菊』『山女日記～女たちは頂を目指して～』『女の中にいる他人』(BSP, 日)、『プレミアムよるドラマ』『最後のレストン』『ふれなばおちん』『ママゴト』『プリンセスメゾン』『幕末グルメ プシメシ!』(BSP, 火)などを番組制作会社制作の定時番組として放送した。また、『シリーズ リアルサウンドが伝える世界』『ボクシングウーマン～上海摩天楼にパンチの音が響く～』(BS1, 1.18)、「殺人者34万人の帰郷～ルワンダ虐殺 22年目の“声”～」(BS1, 1.19)、『ネットで決戦! # (笑) 動画作ってみた』(BSP, 3.29)、『スーパープレミアム』『花嵐の剣士～幕末を生きた女剣士・中澤琴～』(BSP, 1.14)、『特集ドラマ』『絆～走れ奇跡の子馬～(前・後編)』(G, 3.23～24)などを特集番組として放送した。

番組制作会社との委託契約などにあたっては、下請法に準拠した手続きをとっている。また、「番組制作会社との取引基準」に基づき、公共性・透明性を高めるとともに、「NHK放送ガイドライン」を周知し、公共放送としての質の確保に努めている。

購入番組

1. 総合

定時ドラマでは、日曜の午後11時に、英国ドラマ『マスケティアーズ パリの四銃士』(4月～)、トルストイ原作の『戦争と平和』(9月～)、『ダウントン・アビー 華麗なる英国貴族の館』(12月～)、そして芥川賞受賞、又吉直樹作の『ドラマ 火花』(2月～)を放送した。

また、『マスケティアーズ』に関連した特番として事前に『海外ドラマ「マスケティアーズ パリの四銃士」徹底ガイド』(16.3.21)を、また、中盤の6月15日には、『マスケティアーズ 銃士たちの愛』を放送した。

アニメでは、4月から『サンダーバード ARE GO』(土)、アンデルセン賞を受賞した上橋菜穂子原作の『精霊の守り人』(土)を放送した。また、10月からは羽海野チカの人気コミックが原作の『3月のライオン』(土)を放送した。

特集番組としては『サンダーバード ARE GO』から、視聴者投票で人気の高かったエピソードをベストセレクション(12.24)として放送した。

2. Eテレ

定時ドラマでは『ティーン・スパイ K.C.』(前期、水)、『100 オトナになったらできないこと』(12月～、水)、『サム&キャット』(4～7月、11～3月、土)、『超能力ファミリー サンダーマン』(7～11月、土)の米国ドラマを放送した。

ドキュメンタリーでは、定時番組『地球ドラマチック』(土)の中で、「チンパンジーのカネル～旅立ちまでの5年間～」「ボンペイ 知られざるローマ人の暮らし」「ハリネズミホテルへようこそ」「よみがえるアイスマン～科学とアートが明かす謎～」を放送し好評を得た。さらにハリウッド俳優のモーガン・フリーマンが死後の世界や宇宙など、未知の領域を科学的に探究する『モーガン・フリーマン 時空を超えて』(金)を定時番組として放送した。

アニメでは、通年で『おさるのジョージ』(土)と『ひつじのショーン』(土)を放送。4～9月は『スポンジ・ボブ』(土)、同じ枠で10～3月は『ザ・ペンギンズ』を放送した。ティーン向けには『ラブライブ! 第2期』を4月から放送(13回、土)し、12月には集中編成した。

特集番組としては、4月にアニメ『メジャー』の特別編「メッセージ」(4.17)と「ワールドシリーズ編 夢の瞬間へ」(4.9)を放送。7月からは夏のオリンピックに合わせて、ひつじのショーンがさまざまな競技に挑戦する『チャンピオンシップス』、年始には若者に人気の『ラブライブ!』の劇場版、『ラブライブ!』『The School Idol Movie』(1.3)と『Happiness is:』『スヌーピーと幸せのブランケット』(1.1)を放送した。

2月には『くまのがっこう』(2.18)、『カラフル忍者いろまき』(2.19)、『劇場版 まじめにふまじめかいけつゾロリ』『なぞのお宝大さくせん』(2.26)を放送。

3月には、『劇場版 MAJOR 友情の一球』『ひつじのショーン スペシャル』『いたずらラマがやってきた!』(3.12)、『グラフィアロ』『もりでいちばんつよいのは?』『グラフィアロのおじょうちゃん』(3.17)、『スポンジ・ボブ スペシャル』『トリトン王子の反抗』(3.18)、『トムとジェリー』『ジャックと豆の木』(3.19)、『映画かいけつゾロリ うちゅうの勇者たち』(3.20)を放送した。

3. BS1

『BS世界のドキュメンタリー』は、海外のプロダクションが制作したドキュメンタリーを、毎週1つのテーマを設定して放送した。「ヒトラーの残像」(6月)、「まもなくリオ五輪 スポーツ・ドキュメンタリー特集」(7月)、「知られざる国々の素顔」(9月)、「広がる“不寛容な社会”」(11月)など。アメリカのトランプ旋風や、サウジアラビアの実態を描いた番組には、多くの反響が寄せられた。また、番組ホームページ上で視聴者に投票を呼びかけて「もう一度見たい番組」として、放送をラインナップする取り組みも続いた。

さらに世界のニュースに即応する番組も機動的に制作し、「パナマ文書」、「モハメド・アリの時代」(追悼番組)、「プーチンの道」(プーチン大統領訪日)など好評を得た。

4. BSプレミアム

『プレミアムシネマ』は15年度の編成を踏襲しつつ、洋画・邦画をフレキシブルに編成した。月曜夜9時は洋画が中心で、「宇宙戦争」(6.20)、「ターリスト」(9.12)、「羊たちの沈黙」(10.24)、「タイタンの戦い」(12.5)、「タイタンの逆襲」(12.12)、また、8月は「父親たちの星条旗」「硫黄島からの手紙」を2週連続で放送した(8.1、8)。

火曜夜9時は邦画を中心に編成、「舞妓 Haaan!!!」(4.5),「レンタネコ」(6.21),「ゴジラ 60周年記念デジタルリマスター版」(7.19),「箱入り息子の恋」(11.15),「偉大なる、しゅららぼん」(1.10),「あん」(1.31),「ゼロの焦点」(2.21)を放送。8月から10月にかけては渥美清さんの没後20年に合わせ「男はつらいよ」シリーズから「男はつらいよ」(8.4),「男はつらいよ 奮闘編」(8.9),「男はつらいよ 柴又慕情」(8.16),「男はつらいよ 寅次郎相合い傘」(8.23),「男はつらいよ 寅次郎夕焼け小焼け」(8.30),「男はつらいよ 噂の寅次郎」(9.6),「男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花」(9.13),「男はつらいよ 浪花の恋の寅次郎」(9.20),「男はつらいよ 寅次郎物語」(9.27),「男はつらいよ ほくの伯父さん」(10.4)の10本を放送した。

土曜夜には、「インディ・ジョーンズ 最後の聖戦」(5.14),「インディ・ジョーンズ クリスタル・スカルの王国」(5.21),「レ・ミゼラブル」(6.4),「母べえ」(9.3),「アバター」(1.28)などを放送した。

このほか、大みそかから元日にかけては『年越し映画マラソン』として、「ホビット」シリーズ「思いがけない冒険」「竜に奪われた王国」「決戦のゆくえ」3作を一挙放送(12.31),元日は「ゴッドファーザー」シリーズ3作,「るろうに剣心」などを集中編成した。

金曜深夜は,「サクラサク」(4.8),「ゲーム」(5.6),ザ・ビートルズ主演の「ハード・デイズ・ナイト」(6.17),「ニューヨーク1997」(7.15),9月からは放送開始時間が午前0時15分からになり,「荒鷲の要塞」(9.24),「夢」(10.1)などを放送した。また,1月には「タクシードライバー」(1.14)を放送,3月には『第89回アカデミー賞授賞式総集編』(3.11)を放送した。

海外ドラマでは,水曜夜11時15分に米国ドラマ『ワンス・アポン・ア・タイム4』(4月~),スコットランド女王を描いた『クイーン・メアリー 愛と欲望の王宮』(9月~)を放送した。関連特番として事前にドキュメンタリー『ワンス・アポン・ア・タイム特集「いよいよ登場!アナとエルサ」,中盤に『ワンス・アポン・ア・タイム特集 ストーリーブックの秘密』(6.29),『クイーン・メアリー 直前スペシャル』を放送。『ワンス・アポン・ア・タイム4』は,土曜午後5時に再放送をした。

日曜午後9時に韓国ドラマ『イニョプの道』(4月~)を放送し,事前特番『「イニョプの道」放

送 直前スペシャル』,中盤に特番『主演女優来日!「イニョプの道」徹底ガイド』(5.29),総集編を1本放送した。そして,韓国ドラマ『三銃士』(9月~),アガサ・クリステイーの『そして誰もいなくなった』を3本,また,イギリスのドラマ『刑事フォイル』(1月~)を放送した。また,土曜朝8時30分は『奇皇后』,『美しき伝説の商人~キム・マンドク~』(9月~)を再放送した。

旧作ドラマとしては,『名探偵ポワロ ハイビジョンリマスター版』(土)を放送した。

再放送番組として『24』『ファン・ジニ』『ナイトライダー』『チェオクの剣』などを放送した。

アニメは,午後6時30分からの定時放送枠で月曜『美少女戦士セーラームーンR』(4~2月),火曜『ほくらべアベアーズ』『アドベンチャー・タイム』(4~10月),『新しくまのプーさん』(10~3月),木曜『けいおん!』『けいおん!!』(4~1月)を放送。また,日曜午前7時30分から『カンフー・パンダ ザ・シリーズ』(4~10月)と『ほくらべアベアーズ』『アドベンチャー・タイム』(10~3月)を再放送,また,金曜夜11時45分から『新世紀エヴァンゲリオン』(9~3月)を放送した。

特集番組としては,『新世紀エヴァンゲリオン』の放送に続いて『EVANGELION:DEATH (TRUE) 2』(3.24)と『新世紀エヴァンゲリオン劇場版 Air/まごころを,君に』(3.31)を放送した。

国際共同制作

NHKは1980年から,継続的に海外の放送局や制作会社,配給会社と国際共同制作を行っている。事務局は編成局展開戦略推進部に置いている。

国際共同制作は大型番組を制作するうえで今や世界的に常識となっている。この背景には,テレビ番組市場を巡る環境が厳しさを増していることが要因として挙げられる。インターネットとの競合や多チャンネル化で良質なソフトへの需要が高まる中,国際間で制作費を分担して高品質の大型番組を確保する動きが活発化しているといえる。最近では全世界を対象にしたSVODサービスの誕生によりメディアを超えた新たなパートナーシップの構築が課題となっているほか,4K・8Kなどスーパーハイビジョン・コンテンツの国際共同制作も始まっている。16年度に放送した国際共同制作番組は35タイトル,77本であった。

8月に放送された『NHKスペシャル』シリーズ ディープ・オーシャン「潜入!深海大峽谷

「光る生物たちの王国」は、独ZDF/ZDFE、米SVODのキュリオシティーストリームとの共同制作。世界で初めて深海の発光生物たちの生態撮影に挑み、その謎に迫った。12月に放送された『NHKスペシャル』「戦艦武蔵の最期～映像解析知られざる“真実”～」は、フィリピン沖の海底に沈没した戦艦武蔵を発見し映像を撮影したアメリカの制作会社との共同制作。巨大戦艦の知られざる最期を描いた。また、『ループル 永遠の美』では、フランスのループル美術館と初めて8K番組の国際共同制作を行い、スーパーハイビジョンの試験放送で放送するとともに、海外の見本市やループル美術館での上映を実施した。

そのほか16年度に放送した主な国際共同制作番組は以下のとおり。

○ドキュメンタリー

『NHKスペシャル』大アマゾン 最後の秘境 第1集「伝説の怪魚と謎の大遡上^{そじょう}」：マンドラ／アマゾン・タッチ（ブラジル）。『NHKスペシャル』「ドラマ 東京裁判 第1話～第4話」：FATT（オランダ）／DCTV（カナダ）。『NHKスペシャル』「プラネットアースⅡ」：BBC／BBCワールドワイド（英）。『BS世界のドキュメンタリー』「シリーズ 米大統領選目前 オバマの8年を総括する」：ブルックラッピング（英）。

○音楽ほか

『プレミアムシアター』「アンナ・ネトレブコ IN 東京」：UMAE（英）。『プレミアムシアター』「ミラノ・スカラ座開幕公演 歌劇『蝶々夫人』」：RAI（伊）。

放送番組の国際交流

1. 番組交換

NHKは、海外の放送事業者との番組交換を、文化交流の促進や放送を充実させる目的で、協力協定や覚書に基づいて積極的に行っている。16年度も、番組の提供と受け入れが行われた。

（1）ラジオ番組の提供

EBUの新プロジェクト「ユーロラジオ・プレミアムコンサート」に『NHK交響楽団90周年記念特別演奏会』を提供したのをはじめ『セッション2015／2016』を含むクラシック系、ジャズ系番組、計76番組をEBU正会員および準会員に提供した。16年度は、19か国・22放送機関に対し139件、計148時間35分の音源を提供した。

（2）ラジオ番組の受け入れ

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会をはじめ、ドイツ、スイス、フランス、米国を本拠地とする主要オーケストラの演奏会とBBCプロムス2016、ヨーロッパ夏の音楽祭、パイロイト音楽祭などの主要音楽祭、その他にロイヤル・オペラハウス、ウィーン国立歌劇場、パリ・オペラ座等による話題のオペラ公演も数多く放送した。16年度は、19か国・32放送機関から159件、計282時間20分を受け入れた。

（3）テレビ番組の提供

10月に東京で行われたウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会を収録し、EBUに番組提供を行った。提供した番組は、ドイツ、オーストリア、フランスを始め24か国で放送された。

2. 外国放送事業者への取材協力

NHKは、外国放送機関との相互協力の一環として、取材制作協力を積極的に行っている。

協力協定、ニュース取材への協力、海外総支局との関係等を考慮し、依頼に応じて編集・方式変換・衛星伝送や、カメラ、スタジオ、中継車など設備・機材の貸し出し、要員の協力・あっせんを行っている。

16年度の実施件数は、21か国・29放送機関に対して、およそ100件の対応を行った。

4月のG7広島外相会合、5月のG7伊勢志摩サミットでは、NHKがホストブロードキャスターを務め公式行事の撮影を担当するとともに、国際放送センター（IBC）において世界各国の放送機関等に対して映像素材の配信や取材協力を実施した。

中国CCTVには、HD-CAM素材の大型シリーズ番組のファイル化作業を実施した。また、北京テレビ（BTV）とNHK札幌局との間での番組交換や技術協力、番組共同制作を進めるためのコーディネーションを実施した。

10月にアウン・サン・スーチー国家顧問の同行取材で来日したミャンマーMNTV取材陣に対して、映像素材の伝送や、都内ロケのアレンジ等の取材協力を行った。また、東京のスタジオとミャンマー本国のMNTVスタジオとの掛け合い生中継も実施した。

スポーツ関連では、札幌市で開催された「NHK杯国際フィギュアスケート競技大会」（11月）で、カナダCBC、欧州放送連合（EBU）など海外ライツホルダーへのホスト映像配信対応および、米NBCに対するユニ伝送のコーディネーションを

担当した。

また、「ISUワールドカップスピードスケート長野大会」(11月)では、EBUへのホスト映像配信の他、ノルウェーNOSにロケ機材一式のレンタルや会場内でのモニター機材設置の手配などを行った。

「日本賞」教育コンテンツ国際コンクール

「日本賞」は1965年の創設以来、教育番組の国際コンクールとして、世界の教育番組の質の向上および国際理解と協力の増進に貢献してきた。各国の制作者が交流し議論する場や、メディアを利用した教育に関する最新情報を交換する機会として大きな役割を果たし、その結果、いわゆるメディア先進国ではない国や地域からも多くの参加を得ている。近年はインターネットをはじめとする情報技術の急速な進展やデジタル放送の開始など、著しい変化を遂げる教育メディアのデジタル化に対応し、既存の対象年齢別カテゴリーの枠に収まらない革新的なメディアの活用にも作品の顕彰も始めている。

16年の第43回コンクールは、「NHK文化祭」の一環として10月26日から11月2日の8日間、東京・渋谷のNHK放送センターで行われた。応募は58の国と地域の209機関から、コンテンツ部門に282本、企画部門に34本、合計で316本となった。

審査は、日本賞事務局が委嘱した世界12の国と地域の12人の審査委員によって厳正かつ公平に行われた。

12年の第39回からスタートしたIPCEM(イブセム:教育コンテンツ世界制作者会議)も、内容をさらに充実させ、世界のコンテンツ制作者や研究者による最先端情報と意見の交換が精力的に行われた。また、参加者を対象にしたワークショップを開催。発展途上国の制作者育成支援をこれまで行ってきたブルーパタフライのシャロット・コールさんが講師を務めて、世界のさまざまな地域の特性を生かした幼児向けコンテンツの企画開発をグループに分かれて行った。

最終日には「授賞式」が101スタジオで開催された。審査委員、受賞者、大使館関係者などが出席し、俳優の国分太一さんとNHKアナウンサー・塚原愛の司会により、活気あふれる雰囲気の中で各賞が授与された。

「グランプリ日本賞」は、カナダのエスペラモスと国立映画制作庁による「消えたプロガー“アミナ”」が受賞した。(⇒p.639)

また、企画部門の最優秀賞・放送文化基金賞はバングラデシュ、ドゥルーパッド・コミュニケーション-教育開発メディアの「未来は私のもの」に贈られた。なお16年度から、企画部門の最優秀賞受賞者を対象に、制作プロセスの支援をするメンター制度を開始した。

関連番組として、『ドキュメント 日本賞~世界の教育コンテンツ2016~』(E, 11.20),『まると見せます! 世界の教育コンテンツ~日本賞2016~』(E, 12.31)と題して、会期中のドキュメントや各カテゴリーの最優秀作をノーカット版で放送した。

詳細は、<http://www.nhk.or.jp/jp-prize/>

NHK文化祭

NHKが行っている文化的、教育的サービスをより多くの視聴者に楽しんでもらう秋の恒例イベント「NHK文化祭」を開催した。

(1)「たいけん広場2016」

会館公開イベント「NHK文化祭たいけん広場2016」は、11月5日(土)、6日(日)の2日間実施した。制作および事業、関連団体等現場から企画を募集し、屋内・屋外・ふれあいホール・スタジオパークが一体となり、来場者が直接手で触れて楽しめるイベントを展開した。2日間の総入場者数は4万586人を記録した。

名前どおり「たいけん」を重視し、放送局ならではの番組の「本物」を体感できる企画や当日来場しても参加できる企画を積極的に展開した。

また、「ふるさとの食 につぼんの食東京フェスティバル」、「おかあさんといっしょファミリーコンサート」(有料チャリティー・イベント)、スタジオパーク無料公開、どーもくん食堂(一般公開&特別メニュー提供)なども同時開催した。

(2) 関連番組編成

「日本賞」関連では、会期中のイベントのもようを11月20日に放送したほか、日本賞各賞の受賞作を紹介する特集番組を年末に特集編成した。

「たいけん広場」関連では、『ざわざわ森のガンちゃん 放送20周年スペシャル』『えいごであそぼ』『シャキーン!』『ビットワールド』『ガールズクラフト』『コレナンデ商会』(E)など、イベントの様子を定時番組の中で紹介した。ラジオでは、『音楽遊覧飛行ワールドワイドIV』の公開収録を行い、NHK-FMとNHKワールドで、16年11月と17年1月に放送した。

放送番組コンクール

I. 国際コンクール

16年度は、21のコンクールで延べ39の番組が受賞した。

国際エミー賞では、『アニメ 山賊の娘ローニャ』が子どもアニメーション部門で国際エミー賞を受賞。

ABU賞では、テレビ・スポーツ番組部門で、『アスリートの魂』「野村忠宏 最後の背負い投げ」がABU賞を受賞した。

日本賞では、クリエイティブ・フロンティアカテゴリーで「プロフェッショナル 私の流儀アプリ」が最優秀賞（経済産業大臣賞）を受賞。

台湾国際子ども映像祭のテレビ番組部門では、『ミミクリーズ』「きいろとくろのヒミツ」が最優秀テレビ番組賞を受賞した。

シカゴ国際子ども映像祭では、『ミミクリーズ』「みんなは何を見つけた？」がSTEM科学・数学賞（特別賞）を受賞した。

シカゴ国際映画祭テレビ賞では、『ETV特集』「薬禍の歳月～サリドマイド事件50年～」が教育番組：成人視聴者部門で銀ヒューゴ賞を受賞した。

アジア・レインボーテレビ賞の自然・環境ドキュメンタリー部門では、『NHKスペシャル』ホットスポット 最後の楽園 season 2 第4回「天空の秘境 パンダの王国～中国 南西山岳地帯～」が最優秀番組賞・最優秀監督賞・最優秀撮影賞を受賞した。

II. 国内コンクール

16年度は、23のコンクールで延べ90の番組が受賞した。

放送文化基金賞では、テレビドキュメンタリー番組部門で、『NHKスペシャル』「原発メルトダウン 危機の88時間」が優秀賞を受賞した。また、テレビエンターテインメント番組部門では『100分de平和論』が、ラジオ番組部門では『FMシアター』「あいちゃんは幻」が優秀賞を受賞した。

文化庁芸術祭では、テレビ・ドラマ部門で『プレミアムドラマ』「奇跡の人」が大賞を受賞。また、ラジオ・ドキュメンタリー部門では、『広島原爆の日ラジオ特集』「あの日母は少女だった～被爆の記憶をたどる母と息子の対話～」が大賞を受賞した。

「地方の時代」映像祭では、『NEXT 未来のために』「いのちの交差点」に立つ ある救急医の闘い」と『NHKスペシャル』「きこの雲の下で何が起きていたのか」が優秀賞を受賞した。

ギャラクシー賞では、テレビ部門で『ETV特集』「書きかえられた”沖縄戦～国家と戦死者・知られざる記録～」が優秀賞を受賞。また、ラジオ部門で『遠くなる戦争を語り継ぐ～女性ノンフィクション作家の対話～』が優秀賞を受賞した。

アナウンス

1. “公共放送の顔”として多彩な業務を展開

16年度、アナウンサーは参議院議員選挙や東京都知事選挙、熊本地震、岩手・北海道豪雨、福島県沖の地震による津波警報発令など、正確で迅速な報道による公共放送の使命達成に取り組んだ。

8月のリオデジャネイロ五輪と9月のリオデジャネイロパラリンピックには、合わせて36人のアナウンサーを現地に派遣。スポーツの興奮と感動を現地から伝えた。また、スーパーハイビジョンの試験放送やインターネットを使ったライブストリーミングなど、新しい分野の放送・サービスでも専門性を発揮した。

大みそかの『NHK紅白歌合戦』は、長年にわたって“ニュースの顔”だった武田真一アナを総司会に起用し、大きな話題となった。

全国のアナウンサーが制作する『インタビューここから』は12本を制作。『100年インタビュー』は2本制作した。

17年3月末現在、アナウンサーは473人。内訳はアナウンス室127人、ラジオセンター・日本語センター・グローバルメディアサービス・地域放送局346人。女性アナウンサーは全国で83人。

(1) 報道

〔参議院議員選挙〕

7月の第24回参議院議員選挙開票速報では、アナウンス室、ラジオセンター、日本語センター、Gメディアの要員を一体運用し、およそ90人がキャスター、サイド、および15か所の首都圏の事務所中継をになった。また、ネット情報を開票速報に本格的に取り入れる“SoLT”コーナーが初めて導入され、桑子真帆アナが担当した。

〔都知事選挙〕

7月の東京都知事選挙では、18人のアナウンサーがキャスター、中継、サイドを担当。テレビキ

ャスターに高瀬耕造アナ、ラジオには野村正育アナを配置するなど、世論の高い関心に応え国政選挙と同様の体制で臨んだ。

〔災害報道〕

4月、熊本地震が発生。益城町で震度7を観測した最初の大地震は、『ニュースウオッチ9』の放送中に発生。鈴木奈穂子アナが的確に対応した。アナウンス室では、発災当夜から全国応援態勢を組み、熊本や大分など被災地にアナウンサーを派遣した。全国各局から計138人が被災地に入り、中継リポート、スタジオキャスター、ライフライン放送などに当たった。

8月、台風10号が台風として統計開始以来はじめて東北地方に上陸し、岩手県や北海道を中心に大きな被害をもたらした。この「岩手・北海道豪雨」では、岩手県岩泉町などの被災地や関係各局に全国から計18人が応援に入り、現地からの中継リポート、スタジオキャスター、ライフライン放送などに当たった。

11月、福島県沖を震源とする地震で福島県と宮城県に津波警報が発令。発災した時間帯を担当した『おはよう日本』の各キャスターは、避難を促す強い呼びかけを実践。東日本大震災以降検討を重ねてきたもので、「東日本大震災を思い出し、命を守るため今すぐ逃げてください」などのコメントを強い切迫感を込めた口調で繰り返した。

(2) 一般番組

〔定時番組〕

16年度の定時番組ではテレビとラジオ合わせて128番組に延べ220人のアナウンサーが対応した。夜10時スタートとなった総合テレビの『クローズアップ現代+』は、NHKアナウンスを代表する7人の女性アナウンサー（久保田祐佳、小郷知子、松村正代、鎌倉千秋、伊東敏恵、杉浦友紀、井上あさひ）が交代でキャスターを担当する“グループキャスター制”をとった。また、総合テレビの平日夜間番組の強化のために、火曜夜の『うたコン』に橋本奈穂子アナ、金曜夜の『歴史秘話ヒストリア』に井上あさひアナを新たに配置するなどした。

〔特集番組〕

BSプレミアムでスタートした大型紀行番組『一本の道』は、アナウンサーが歴史や自然に彩られたヨーロッパ各地の“一本の道”を歩き、その地に生きる人々と出会いながら、感動や喜びを伝える番組で、計10人のアナウンサーが旅人を務めた。アナウンス室では、ふさわしい個性や世代のアナウンサーを全国から選定して配置した。

夏の特集編成では、23の番組に計32人のアナウンサーが対応した。夏の紅白とも言われる『思い出のメロディー』（8月）は、テレビの司会を高山哲哉アナ、ラジオ実況は橋本奈穂子アナが担当した。また、BSプレミアムの『スーパープレミアム』『スペシャルライブ! 京都 五山送り火』（8月）は、総合司会の武内陶子アナを始め、計8人のアナウンサーが3時間の生中継に対応した。

年末年始の特集編成では、『NHK紅白歌合戦』の総合司会を武田真一アナが初めて担当。「紅白裏トークチャンネル（副音声）」は、『うたコン』を担当する橋本奈穂子アナが務めた。

3月の東日本大震災6年関連番組では、テレソン『特集 明日へ つなげよう』にキャスターの畠山智之・寺門亜衣子・伊東敏恵の各アナをはじめ、中継リポーターなど合わせて7人のアナウンサーが参加した。また、『おはよう日本』『ニュース7』『ニュースウオッチ9』のキャスターが被災地からの生放送に対応した。

(3) スポーツ

8月のリオデジャネイロ五輪では、現地ブラジルに15人の実況アナウンサーと8人のキャスターを派遣。国内では東京および地域の28人が、実況や番組キャスターを担当した。総合テレビ、BS1の放送に加え、スーパーハイビジョンの試験放送やインターネットを使ったライブストリーミングなど、新しい分野の放送・サービスでも専門性を発揮した。五輪では初めてとなるスーパーハイビジョン中継では、ベテランの刈屋富士雄・藤井康生アナらが案内役を務め、歴史的記録としてのクオリティーも求められる放送を支えた。リオ五輪では、ネット独自コンテンツの展開も大幅に強化された。ライブストリーミングのコメントリーに延べ14人の要員を配置し、期間中ほぼ毎日対応。従来型の実況のほか、コメントは選手紹介等の最低限にとどめる「案内放送」、ゲストを招いてトークを中心に伝える放送など、インターネットのコンテンツにふさわしいコメントの形態を探る試行を行った。

9月のリオデジャネイロパラリンピックでは、NHKとして初めての競技生中継を行った。現地には13人を派遣。国内では22人のアナウンサーが関わった。担当者は、それまでの研究会で積み上げてきた知識やスキルを生かして放送に臨み、視聴者からは「パラリンピックの放送を初めて見たが、アナウンサーが分かりやすく説明してくれ、競技の面白さがよく伝わった」などの好評意見が多く寄せられた。

2. アナウンス制作番組

全国のアナウンサーが制作する総合テレビのインタビュー番組『インタビュー ここから』は、「歌手 坂本冬美」「音楽評論家 湯川れい子」「元サッカー選手 澤穂希」「お笑いタレント はなわ」「柔道家 野村忠宏」「コメディアン 小松政夫」「野球解説者 和田一浩」「マラソン五輪銀メダリスト 君原健二」「漫談家 ケーシー高峰」「シンガーソングライター 南こうせつ」「元競泳選手 松田丈志」「作家 村田沙耶香」の12本を放送。タイムリーな人選を心がけた。

BSプレミアムの特集番組『100年インタビュー』は、「元サッカー選手 澤穂希」「アーティスト 小田和正」の2本を制作した。

『ラジオ深夜便』のインタビューシリーズでは、「戦争・平和インタビュー」（8月）を5本、「人権インタビュー」（12月）を5本制作した。全国の若手アナウンサーが、被爆者や戦争体験者、差別や偏見と闘う活動をしている人などの声を紹介した。

“耳で聴く短編小説”として、アナウンサーの朗読で幅広く文学作品の魅力を届ける『ラジオ文芸館』（R1）は、新作26本、アンコール23本を放送。朗読、スピーチ、敬語などのノウハウを分かりやすく紹介する『ことば力アップ』（R2）は、新作32本、アンコール20本を放送した。

ラジオ特集では、アナウンサーが趣味の世界についてディープに語る『アナウンサーのディープな夜』（R1、8月）や若者が抱える問題を掘り下げる『ガチゴエ』（R1、11月）、話題の芥川賞作家に迫った『新春インタビュー』『“コンビニ人間”村田沙耶香の創作の源にせまる』（R2）など10本を放送した。大好評の『アナウンサーのディープな夜』は、17年度の定時番組として、月1回放送されることになった。また、有働由美子アナウンサーが企画・進行した『春は別れの季節…今日は一日“失恋ソング”三昧』（FM、3月）は、ふれあいホールで公開生放送を実施。入場希望の応募者は5,000人超。番組に2,000通のメールが寄せられるなど、大きな反響があった。

映像デザイン

映像デザイン部は、番組やイベントなど協会に関わるビジュアルの根幹を担い、細やかで高度な専門性を集結し、質の高いデザインを提供することで、より豊かなコンテンツの創造に寄与した。

映像デザインを行った番組としては、『NHKスペシャル』『報道・スポーツ番組』『教育・文化福祉番組』『ドラマ番組』『音楽・芸能番組』と、すべてのジャンルで貢献している。また、さまざまなコンテンツに対応できる幅広いノウハウの蓄積と新たな表現手法の開発を行い、未来のデザイン発展へとつなげる取り組みを継続して行った。

さらに、15～17年度デザインセンター事業計画に基づき、NHKブランド力強化への貢献、業務の高度化への対応、放送資産の活用など、全局的な視点に立った取り組みも展開した。

引き続きデザインの専門集団として、NHKのビジュアルの質を向上させていくことに貢献していきたい。

1. 番組制作における映像デザイン

(1) NHKスペシャル・大型企画番組

『NHKスペシャル』『18歳の質問状』では、これまでの政治討論番組とは異なる、18歳の参入を念頭に入れたカジュアルな空間をデザイン。また、『キラーストレス』『古代遺跡透視』では、ふだん『Nスペ』を見ない視聴者層に意識して「華やかさ」をコンセプトとしたデザインを行った。女性や若年層にも受け入れられる「楽しさ」を意識して、良い意味で敷居の低い、より身近な番組の開発に取り組む。

また、4月に発生した熊本地震の対応は改定のスタートと重なったが、関連『Nスペ』3本、『クローズアップ現代+』5本、『NEXT 未来のために』2本を作成。英国EU離脱の緊急時は翌日放送の厳しい対応となった。報道局やNHKアートの各担当者と連携し無事に放送を終えた。

『MEGA CRISIS 巨大危機』シリーズでは「差し迫った時間」を分かりやすく象徴的に表現したトークセットを制作。また、CGやVFXには多様なエフェクターを駆使し実際の自然音を加工することで、映像の質感やリアリティーとの高い融合を実現した。「完全解剖 ティラノサウルス」ではデジタル技術により恐竜の視覚化を全面に打ち出したスタジオ空間をデザイン。「“血糖値スパイク”が危ない」「あなたもなれる“健康長寿”徹底解明 100歳の世界」では、メッセージを伝える明快な配色や、植物など有機的な素材を用いて、一目で内容が伝わり、番組途中からでも理解しやすい、視聴者に親しみやすいデザインを進めている。

「マネー・ワールド 資本主義の未来」シリーズでは難解な経済理論の概念図を手書きのキャラ

クターアニメーションや巨大模型によるスタジオセットで、分かりやすく具体的に伝えるデザイン演出を行った。

CGやVFX映像に対しては新しいソフトによるアナログとデジタルを融合したサウンドづくりを追究する。発想豊かな若手デザイナーや外部パワーも適材適所で投入していく。

(2) 報道・スポーツ番組

16年リオオリンピック・パラリンピックでは、2020東京大会への礎とする全局的な方針に沿い、センター全体の業務体制や対応領域の拡充を図った。

オリンピック・パラリンピック事務局を中心に各番組制作や技術セクション、NHKアートや外部CGプロダクションと調整を図り、本部ならびに現地のスタジオセット、IOC配布による公式グラフィックスを元にしたテロップベースやオープニングタイトルなどを手がけ、一貫したトータルデザインを実現した。

4年後の東京五輪を見据え、経験や専門分野の異なる多様な人材でチーム構成。情報・グラフィックスデータの効率的な共有を図りデザインの統一性の向上に努めた。引き続きNHKグループが一体となった運営を図りたい。

年度当初にNCフロアーに大型LEDを導入し大胆に分かりやすく情報を伝えるニュース演出を可能にした。新年度のキャスター変更に伴い『おはよう日本』『ニュース7』『ニュースウオッチ9』を中心に新キャスターを引き立てる新鮮で親しみやすいデザインを提供した。

緊急報道は、各セクションとの横の連携が必要であるため、今後も積極的な関係構築に努めつつ、迅速な対応ができるようデザイン力を養成していく。

また、緊急報道用セットは多様な演出表現を可能にする高度なデザイン性と迅速簡便に「誰にでも建てられる」機動性を求められおり、予測不可能な状況における“多様なテーマに対応する汎用セット”という難易度の高い課題に取り組むため、部のアイデアを結集させて取り組む。

(3) 教育・文化福祉番組

『ガッテン!』『おかあさんといっしょ』に若手デザイナーを起用。番組コンセプトを的確に表現し、輝度や彩度を高めたデザインで対応した。また、59歳以下の視聴者を意識して、『ファミリーヒストリー』では、テーマを明るいトーンにリニューアル。

定時番組や開発番組も制作の狙いと視聴者の反

応のズレなど担当者と情報を共有し、細やかなリニューアルや改善に努める。後期改定や17年度改定に反映させるため、デザイン面での分析検証を進める。

また、開発番組として『歴史紀行バラエティーGOSISON』や『海外出張オトモシマス!』において、「ファミリー層×歴史紀行」「20～30代女性層×海外・小物・ビジネス」など番組コンセプトに基づきビジュアルイメージの共有を図り、明るくポップな曲で視聴者の興味を持続させていくデザインに取り組んだ。

(4) ドラマ番組

『大河ドラマ』『真田丸』は明快な色遣いで戦国分布図と勢力の対比を表現し、これまでの視聴者層に加えて若年層を引き付ける分かりやすいビジュアル表現を行った。重厚さだけでなく軽快で見やすい「新しい戦国大河」を継続することで、さらなる視聴者の獲得を目指した。

「おんな城主 直虎」は「真田丸」とは一転、女性ヒロインの「しなやかさと柔らかさ」を強調し、新たな視聴者層の拡大を目指した。今川家を物語前半の最大の脅威として分かりやすく表現。

『連続テレビ小説』『とと姉ちゃん』における映像デザインは視聴者の記憶に残る「昭和」の美術表現に取り組んだ。とりわけ商品テストに登場する電化製品を見つけ出すだけでなく、登場人物として「演技させる」ために、新品同様に動く工夫を凝らした。「あなたの暮らし」編集部では、モデルとなった人物像をほうふつとさせる臨場感あふれる空間演出を細部にわたって実現した。

『土曜ドラマ』はリオオリンピックの影響もあり、変則的な尺・時間帯での放送となった。「トットてれび」「夏目漱石の妻」「スニッファー 嗅覚捜査官」などエンターテインメント・人間ドラマ・ハードタッチといった多彩なラインナップに美術・音響ともに全力で取り組んだ。なお、これまでは作品性や社会性の描写などに定評がある一方で視聴者に敷居の高さを感じさせる枠となっていたが、午後8時台の28分尺となり、改めて「観てもらえる番組」への取り組みをスタッフ間で共有した。

『大河ファンタジー』『精霊の守り人』シーズン2は、リアルな質感を追求したCGとセットにより前回にも増してパワーアップした美術表現で原作の世界観を広げた。シーズン3も年度内にクランクアップ。特撮監督に樋口真嗣氏（『シン・ゴジラ』）を起用し、最新技術を駆使した模型・実写・CGの組み合わせで迫力ある戦闘シーンを

制作している。また、4K制作に求められる美術の精度や質感の見極め方、外部プロダクションとの共同制作手法など、長期にわたる制作ならではの知見と経験を得ることができた。部内で共有し今後の礎としたい。

『土曜時代劇「忠臣蔵の恋」』のデザインは、正統派の「忠臣蔵」を描きながら女性主人公の目線の叙情と大奥の華やかさを強調し、初めての挑戦となった土曜夕方放送ながら堅調な視聴率を獲得した。

(5) 音楽・芸能番組

16年の『NHK紅白歌合戦』の美術コンセプトは「NHKホール全体がひとつになる、史上最大のステージ」2階席の手前に空中のルーフステージを設け、ホールのすべてを使い尽くすデザインに挑戦。日本を一つにする大きなステージで「夢を歌おう」のテーマを体现した。また、今回は2020年に向けて新たな視聴者層を獲得する取り組みの初年度となる。大規模でありニッポン中が注目する「紅白業務」を通して伝統的なスキルを継承しつつ、視聴動向の変化を広い視野で捉え、これからの時代に対応できるよう、計画的にチーム構成を行い実施した。

『思い出のメロディー』では、若手デザイナーを抜てき。幅広い世代が高揚できるようなアミューズメントパークをモチーフにしたデザインコンセプトで多彩な番組演出に応えた。

定時番組『うたコン』や『バナナ♪ゼロミュージック』では、明るく華やかな画面作りを行い、汎用的に利用できる柱・階段などのセットパーツを生かして、経済的かつ効率的なセット運用を行った。

2. 新サービス

(1) 8月から始まったスーパーハイビジョン試験放送に合わせて、SHVロゴとステーションイメージCG映像を作成。ロゴマークはシンプルながらもさまざまな映像展開に対応可能。イメージCG映像は繊細でカラフルな糸が新たな世界を紡ぎだし日本的なイメージと最先端テクノロジーを感じさせる仕上がりとなっている。

(2) 「NEXT STAGE PROJECT2017」を立ち上げ、4KHDRに対応した人物デザインと高品質美術セットを研究。3月にスタジオ収録テストを行った。HDRにおける人物の肌の色の出具合は見た目とも違うため対策が必要となる。高画質では使用できなくなる共通セットの洗い出しも含め実践的な検証、研究を行った。さらに将来構想と

して4K大河に向けて、VRやLEDホリゾントなど新美術手法への挑戦を予定している。

3. コーポレートデザイン

10月に実施された『東京2020 12時間スペシャル →2020』では同時開催のイベント「Nスポ」と連動したトータルデザイン（ウェブ、番組デザイン）を実施。映像デザイン部が中心となり企画した【→2020】のタグラインをセットやグラフィックにも展開。報道局プロジェクトとも連動を図り、NHKのコーポレートメッセージとして発信した。利用しやすいインターネット関連デザインの企画創造。

また、開発番組『おやすみ王子』では番組のセットやグラフィックのデザインと共にVRコンテンツを企画。人気俳優による一人称視点の小説読み聞かせ体験を提供した。

さらにウェブにおけるVRコンテンツや360度動画はドラマ番組のスタジオツアーでも活用されている。今後とも各番組でノウハウを蓄積しつつ、新たなサービスの創出を積極的に提案していきたい。

4. CG・VFX窓口

14年度よりCGコーディネーションからCG・VFX窓口と名称を変更し、これまでのペイントリソースの管理運用、CG発注のコーディネーション機能に加え、番組や広報関連の制作物においてもアートディレクションの役割を強化し、番組対応で実績を重ねた。

9月放送の『NHKスペシャル』「完全解剖 ティラノサウルス」では「生命大躍進」のCG制作フローをベースに、制技・MTと共同して最新の研究に基づくリアルな4KCG映像の制作を進めている。CG・VFX窓口は4月より、高度な専門性の蓄積と育成を目的として企画・開発班として新たに位置づけた。コーディネーション業務にとどまらずディレクションやプロデュースのスキルを組織的に向上させている。

5. CS向上活動

公共放送と受信料制度の理解促進を図る映像デザインの分野からCS向上活動を行った。

愛知県立芸術大学ではドラマ美術のノウハウについて、渋谷の放送センターでは多摩美術大学学生を対象にスタジオ周辺の機能、放送番組制作について、神戸芸術工科大学では一般の視聴者も参加してエンターテインメント番組の成り立ちにつ

いて解説。福井工業大学では『NHK紅白歌合戦』の映像デザインなどNHK番組のデザインワークについて講義した。

また、民放2社と共同し「TVデザインの仕事を学ぶ」をテーマに多摩美術大学でトークセッションを開催。また、異業種交流として「SONYクリエイティブセンター」と情報交換しお互いの知見を広げた。

秋に開催された「NHK文化祭」では505スタジオにて主に「ドラマ番組美術の紹介」展示を行い、公共放送の理解促進に努めた。

東京・足立区発ドラマ『千住クレイジーボーイズ』の舞台となった「北千住」において編成プロモーション・ドラマ部・NHKアートと連動し「ドラマができるまで」の過程を美術小道具などの実物展示をふんだんに盛り込み小学生に向けて紹介した。

音響デザイン

音響デザイン部は、コンテンツを音から支える専門家集団として、高い専門知識とスキルで放送サービスを充実させ、経営計画の実現とコンテンツの質の向上に取り組んできた。加えて16年度もNHKのブランド力強化への貢献、NHK独自のライブラリーミュージックの充実、22.2ch超高臨場感立体音響番組の制作など、放送音響デザイン界の先導的役割を担った。

音響デザインを行った番組として、「老人漂流社会」、「MEGA CRISIS 巨大危機」シリーズ、「完全解剖 ティラノサウルス」、リオ五輪関連の「金メダルへの道」などの『NHKスペシャル』を制作。熊本地震や相模原連続殺傷事件など緊急性の高い番組にも迅速に対応した。ドラマ番組では、『大河ファンタジー』『精霊の守り人II』では独特なファンタジー世界を多様な民族楽器と効果音を融合させダイナミックな音響表現にチャレンジした。

ドラマ番組では橋田賞を受賞した『土曜ドラマ』『夏目漱石の妻』や『木曜時代劇』、戦国時代最後の名将・真田幸村の生涯を描いた『大河ドラマ』『真田丸』、家族の愛と挑戦の物語を音で力強く後押しした『連続テレビ小説』『とと姉ちゃん』などを制作した。

情報・構成番組では6年目の震災報道、多彩なラインナップの『NHKスペシャル』など、楽曲制作を含めてトータルな設計で音響プロデューサーとして番組演出の一翼を担ってきた。22.2ch音

響では『ルーブル 永遠の美』の制作や空間パナーの開発などを手がけた。

1. 番組制作関連

(1) 東日本大震災関連番組

東日本大震災発生から6年となる16年度、震災を扱う多様なアプローチの番組が制作された。音響デザイン部では『NHKスペシャル』『クローズアップ現代+』『ETV特集』『明日へ つなげよう』『こころフォトスペシャル』をはじめ、『目撃!日本列島』『NEXT 未来のために』等で東日本大震災を扱った番組を担当。時間の経過と共に被災地それぞれが抱える課題が複雑になり、また、視聴者の温度感が変化中、それぞれのコンテンツの目的を精査し、視聴者の関心を喚起させ番組の意図が的確に伝わるよう音響構成に取り組んだ。特に震災6年となる3月には『NHKスペシャル』5本、『特集 明日へ つなげよう』をはじめとする震災関連番組が多数制作され、音響デザイン部の総力を挙げてこれに臨んだ。

(2) 『NHKスペシャル』

政治・経済・社会・文化・福祉・自然など多岐にわたる番組に高度な音響表現で対応した。

「MEGA CRISIS 巨大危機」シリーズでは「差し迫った時間」「科学者の闘い」をコンセプトに、テーマ曲ほか音楽全曲を委嘱したオリジナル音楽で構成。CGやVFXには実際の自然音をエフェクターで加工した音を使用したリアリティーの高い表現で、自然の脅威を正しく認識し、減災・防災につなげてもらえることを目指した。

「完全解剖 ティラノサウルス」では最新の音響ツールを導入し、人や動物の声を自在に加工することで、迫力ある恐竜の鳴き声作りを行い、視聴者の想像力を喚起させる音響デザインで、史上最強の恐竜ティラノサウルスの1億年に及ぶ進化の物語に誘った。

「大アマゾン 最後の秘境」は圧倒的な映像パワーを最大限に引き出す音響アプローチで、秘境アマゾンの臨場感を再現、初めて見るアマゾンの知られざる魅力に迫った。

リオ五輪関連の「金メダルへの道」MIRACLE BODY (ミラクルボディ)、社会国際問題の「巨龍中国」など多様な大型シリーズや「18歳の質問状」「不寛容社会」「マネー・ワールド 資本主義の未来」などジャーナリズム視点と分かりやすさを音楽的に両立させるサウンドデザインに努めた。

「戦艦武蔵の最期」では、4Kのリアルな戦闘

シーンに対して資料を基に海軍戦闘準備ラッパやグラマンの飛行音、機関砲の音を再現し、当時の緊張感を再現させた。

(3) 報道・スポーツ番組

『NHKスペシャル』「緊急報告 熊本地震 活断層の脅威」「調査報告 相模原・障害者殺傷事件～19人の命はなぜ奪われたのか～」などの緊急性の高い番組では迅速にマンパワーを集結し、確実な送出に向けたマネジメントを進めながら、番組の本質を浮き彫りにする音響アプローチを行った。

『クローズアップ現代+』では、災害報道・政治・経済・国際情勢など多岐にわたる内容の最新の情報を丁寧に分かりやすく構成する音響デザインを実践。時々刻々と状況が変化する事象にも機動力を発揮して対応した。リオオリンピック・パラリンピックは、テーマソングを親子2世代に人気がある安室奈美恵に委嘱。熱戦が続く大会を盛り上げた。毎日のハイライト番組や生中継スタジオ、事前特番や総集編などでは、東京五輪を見据え、世界に発信するグローバルなデザイン実現に向け、若手デザイナー層を積極的に起用した。

(4) 情報・教養・開発番組

『プロフェッショナル 仕事の流儀』『先人たちの底力 知恵泉』『新日本風土記』『ドキュメント72時間』『目撃!日本列島』『NEXT 未来のために』『ファミリーヒストリー』『ETV特集』『ワイルドライフ』等、レギュラー番組において、それぞれの番組カラーを前面に打ち出し、訴求力を高めるサウンドデザインを行った。開発番組『海外出張オトモシマス!』や『ノーナレ』『おやすみ王子』『SFリアル』など若年層へ向けた実験的な番組では、若い視聴者の関心に応えられるよう、音楽そのものを聴いても楽しめるような個性あふれる音響デザインで番組を支えた。

(5) ドラマ番組

『大河ドラマ』『真田丸』では、三谷脚本特有のセリフまわしや登場人物の個性的な持ち味を際立たせる音響設計を行い、重厚さだけでなく軽快で見やすい「新しい戦国大河」として視聴者から大きな支持を得た。

『連続テレビ小説』『とと姉ちゃん』は遠藤浩二氏の音楽により、何気ない日常描写のぬくもりをフォローし主人公の成長を心地よく支えた。戦中の不穏さと家族を取り巻く大きなうねりが前半戦の山場であり、朝ドラらしい明るさも失わず昭和の時代の表現に取り組んだ。

『大河ファンタジー』『精霊の守り人』シーズ

ン2では、今シーズンのテーマとなる「心の闇」になぞらえ、さまざまな人の声（ボイス）をモチーフにした劇中音楽や効果音で新たな舞台の世界観を構築した。

『土曜ドラマ』はリオオリンピックの影響もあり、変則的な尺・時間帯での放送となった。「トットてれび」「夏目漱石の妻」「スニッファー嗅覚捜査官」などエンターテインメント・人間ドラマ・ハードタッチといった多彩なラインナップに取り組んだ。

このほか『ドラマ10』『特集ドラマ』『木曜時代劇』においても、それぞれの番組の特徴を生かした音響設計を行った。

また、地域局発のドラマ『進め!青函連絡船』(青森)、『朗読屋』(山口)、『千住クレイジーボーイズ』(東京・足立区)、『宮崎のふたり』(宮崎)、『舞え!KAGURA姫』(広島)、『ラジカセ』(三重)、『アオゾラカット』(大阪)においては大阪、名古屋各局の音響デザイナーとも連携してロケ収録、現地MA等音響分野からの地域貢献を果たした。

オーディオドラマでは『FMシアター』『青春アドベンチャー』『新日曜名作座』『特集オーディオドラマ』など、それぞれの番組の特徴を生かしつつ、音響デザインの原点ともいえる音声メディアの表現における伝統の継承と挑戦を続け、リスナーの想像力をかきたてる表現力を存分に発揮した。

(6) 22.2ch超高臨場感立体音響

16年8月から試験放送が開始し、2Kから4K・8Kの一体化制作が一層強化された。8K制作本数は38番組49本と前年比で約2倍となったが、局内連携を密にし、新規開発機器の導入により、効率的な一体化の業務フローを確立、安定した制作体制を実現している。リオ五輪でも、デイリーハイライトなど、今までの8Kにはない即応性の高いスピーディーなMAフローを構築し、平昌五輪の新たなスポーツ演出への足がかりとした。

また、8KHDR元年となった16年度は、長尺で22.2chサラウンドのだいたいご味を生かしたドキュメンタリーの音響制作に挑戦した。フルオーケストラで音楽制作した8K『ルーブル 永遠の美』においては、本家ルーブル美術館およびベルリンでの国際見本市でも、ハイトサラウンドならではの臨場感のあるみずみずしい音響表現に好評を得て、海外からの共同制作打診も増加した。

また、4K制作においては、『プラネットアース』で22.2chサラウンドのスキルを生かした高品

質な5.1chサラウンドへの変換手法を活用し、また、『土曜ドラマ』「4号警備」では、連続ドラマでは初の4K、5.1chサラウンド制作に着手し、新たなフローを検証しながら、効率的で安定した制作を行っている。

2. 番組企画関連

85年4月から放送が始まった『音の風景』は32年目を迎えた。日本の津々浦々、時には海外にまで範囲を広げ、音の魅力を伝える音声波のミニ番組である。16年度は5分の通常版を40本制作した。ナレーターは中川緑アナウンサー。新作と再放送を合わせ、FMで9枠、R1で2枠、R2で19枠の放送を行った。

3. 設備関連

音響デザイン部で開発したステレオから5.1ch・22.2chサラウンドヘリアルタイム変換する「22.2ch音楽アップコンバーター」を改修し、機能を高めて、8K紅白生放送で使用。8K音楽番組の必須アイテムとして定着している。また、「音楽アップコンバーター」を応用した「3D効果音空間パンナー」が完成。立体音響の音場で複雑なプロセスを行うことなく、任意の場所に音を配置するための機器が完成し今後の番組で活用していく。

また、「全方位集音+指向性可変マイクアレイ」を開発。全方向の音を収録した後に、デジタル処理により任意の方向音をズームして取り出すことができるプロセッサを今後開発していく。VR演出や新たなスポーツ映像の音響演出に生かす検証を継続しつつ、「南極大冒険」のオーストラリア・ニューゼーランドロケに参加し試験使用し、より機動的な高臨場音収録システムの完成に邁進する。

4. 海外視察

世界最大の音響機器展「NAMM Show」、世界先端スタジオであるハリウッドのポスプロスタジオを視察。先を行く一体化制作スキルを吸収するとともに、世界的潮流となっている22.2chからドルビーアトモス、AURO 3D等の音響フォーマットの互換検証ソフトを調査、また、インターネット等のストリーミング放送で付加価値の高い3Dヘッドフォンなど開発現場等を視察した。

5. サウンドステーション・ライブラリー

季節の地域シリーズの録音を16年も継続した。

番組に必要な日本のさまざまな地域音を年間通して収録する目的で、『連続テレビ小説』「ひよっこ」の舞台となる茨城県で定点録音を敢行した。

さらにリオオリンピックを見据え、「バスケットボール」等の音源を収録するとともに、8Kコンテンツの増加に備え、番組で使用頻度の高い街音俯瞰ノイズを、16chマルチチャンネルにて録音した。

6. 事業計画関連

(1) ミュージックライブラリー

「NHKミュージックライブラリー」はオープンから5年を迎え、ユーザー数は外部効果担当者を含め1,600人、登録作曲家126人、総登録楽曲数6,500曲へと伸長した。全国45局137のニュース・情報番組で定時使用されているほか、国際放送ラジオジャパン17言語の番組でも定時使用されている。3年目となる「国際展開・二次展開を目指す単発Nスベの楽曲委嘱」では、『NHKスペシャル』「老人漂流社会」「若冲 天才絵師の謎に迫る」「決断なき原爆投下」「完全解剖 ティラノサウルス」「あなたもなれる“健康長寿” 徹底解明100歳の世界」「戦艦武蔵の最期」「メルトダウンFile.6」の7番組の委嘱を実施。スピーディーな海外発信をサポートした。「ラジオ第2の完全ライブラリー化」では、これまでのヨーロッパ言語に加え、リスナーの圧倒的に多い英語にも範囲を広げ14番組の委嘱を実施し、その役割を完了した。ベーシックライブラリーでは、東京オリンピック・パラリンピックを見据え重点的に進めてきたスポーツ番組関連楽曲や、需要の多い情報バラエティ分野の楽曲を多数制作し、地方局サポートにも貢献した。

(2) につぼん動物暦

番組制作支援のためのウェブデータベース「につぼん動物暦」の開発に着手して5年目。16年度は、15年度のデータにせみ類や鈴虫などの鳴き声を新たに加えた。環境省による調査データをベースに、新潟県の博物館「胎内昆虫の家」の協力を仰ぎながら国内で見られる主な昆虫の鳴き声や写真・動画を新たに追加した。これで、「につぼん動物暦」のデータ数は、鳥326件・かえる46件・せみ29件・昆虫24件となった。

補完放送

I. ハイブリッドキャスト

ハイブリッドキャストは、放送にインターネットを組み合わせて、放送をより豊かにする放送通信連携サービスである。

放送波に含まれている信号の指示に従ってインターネット経由で必要なアプリケーションを取得し、そのアプリケーションをテレビや携帯端末のHTML5ブラウザ上で動作させることで実現する。これまでのBMLによるデータ放送よりも表現力が向上し、さまざまな情報や機能を提供できる。

NHKは一般社団法人IPTVフォーラムが策定した技術仕様に沿った開発を進め、対応受信機も市場に登場したことから、13年9月2日に総合テレビでハイブリッドキャストのサービスを開始した。

dボタンを押すと、インターネットに接続されたハイブリッドキャスト対応テレビではハイブリッドキャストのホーム画面が表示され、各種アプリケーションを利用することができる「サービス連動型」(独立データ放送に相当)、番組の進行に合わせてコンテンツが展開する「番組連動型」の2つのサービスがある。

14年9月29日からは、教育テレビ・BS1・BSプレミアムでもハイブリッドキャストのサービスを開始、総合テレビと同じアプリケーションを利用できるようにした。

17年3月1日から、dボタンを押すと表示されるホーム画面をデータ放送のトップ画面と共通化した。

○サービス連動型 主なサービス

「番組表」

総合・Eテレ・BS1・BSプレミアムの番組表を最大30日前から7日先まで表示。

「ビジネス」

東証1部、海外市場、外国為替の現在値を表示。

「スポーツ」

MLB、プロ野球、Jリーグの経過と結果。スポーツ番組の放送予定。

「気象」

現況、3時間天気、週間天気、警報・注意報など。

「スクロールニュース」

テレビ視聴中、画面の下にニュースのタイトルをスクロール表示させるサービス。好きなジャ

ナルを選んで表示させることができ、気になるニュースだけを選んで見ることができる。

『きょうの料理』『すてきにハンドメイド』

『ガールズクラフト』

材料や作り方をテキスト表示するとともに制作のポイントを動画で掲載。

『しごとの基礎英語』

番組のミニドラマと発音練習動画を視聴できる。

『大河ドラマ』『おんな城主 直虎』

『連続テレビ小説』『べっぴんさん』

PR動画、番組セットの360度画像を掲載。

○番組連動型

〈定時番組〉

総合テレビ『あさイチ』

番組マスコットの「ブタマン」がクイズ企画「スゴ技Q」への参加を促す。

Eテレ『しごとの基礎英語』

サービス連動型への誘導。

BS1『経済フロントライン』

番組内の経済リポートを番組中に最初から見直すことができる。

BSプレミアム『世界ふれあい街歩き』

テレビと連携したスマートフォンやタブレットに旅の地図や写真を表示するセカンドスクリーンサービス。

II. データ放送

00年12月1日のBSデジタル放送の開始と共に、デジタル放送ならではの新しいサービスとしてスタートしたNHKのデータ放送は、「生活をより便利で豊かにするサービス」「緊急時に役立つサービス」を基本に放送を行っている。

03年12月1日に東京・大阪・名古屋で開始された地上波データ放送は、06年12月1日までに全国の都道府県庁所在地とその周辺で放送がスタートした。07年10月1日をもって、NHKの全放送局が独自のデータ放送を送出するようになった。

データ放送は、映像・音声による通常の番組(本線番組)と連動しない「独立型」と、本線番組と関連した内容を同時に放送する「連動型」に分けられる。さらに、長期間定時的に編成する「定時」、一定期間編成する「特集」、地震・津波発生時や気象警報発令時などに随時編成する「随時」に分類される。また、「連動型」の一形態として、リモコンを使ってアンケートやクイズに参加できる「双方向型」がある。

1. 地上データ放送

総合テレビでは、データ放送を地域サービスの柱としており、地域と全国の『ニュース』『気象情報』と共に、独立型データ放送で暮らしに役立つ地域情報や生活情報を放送した。また、防災や生活に役立つ情報として『台風情報』や『大雨情報』『地震・津波情報』そして13年8月30日から運用が開始された『特別警報』等を随時放送した。

また、データ放送とインターネットに同時に情報発信できる「災害情報入力システム」の運用を13年6月に開始。同システムと自治体の避難情報等を伝える「公共情報コモンズ」との連携を推進している。

特集番組では、『第67回NHK紅白歌合戦』や『NHKスペシャル 私たちのこれから』『スーパープレミアム 祝ウルトラマン50～乱入LIVE! 怪獣大感謝祭～』等で視聴者参加の双方向型データ放送を実施した。

〔定時番組の概要〕

(1) 総合テレビジョン

○独立型

- ・『ニュース』（地域および全国）
各地域の地域向けニュースと全国ニュース。
- ・『気象情報』
3時間ごとの天気、週間天気、気象の現況など。
- ・『地域情報』
各地域放送局が、地域情報、防災情報、生活情報等を提供する、きめ細かな地域向けサービス。

○連動型

- ・『大河ドラマ』『連続テレビ小説』『総合診療医ドクターG』

○双方向型

- ・『あさイチ』『スタジオパークからこんにちは』

(2) Eテレ

○独立型

- ・『きょうのイチオシ!』
Eテレのおすすめ番組を紹介
- ・『きょうの料理』『アニメ 境界のRINNE 2』

○連動型

- ・『シャキーン!』『アニメ はなかつぱ』『コレナンデ商会』

○双方向型

- ・『Let's天才てれびくん』『Rの法則』

(3) ワンセグサービス

06年4月から地上デジタル放送でワンセグサービスを開始し、08年4月からは地域向けサービスを全国の放送局で開始した。データ放送は、総合

テレビでは『ニュース』『気象情報』のほか、『プロ野球』『Jリーグ』『大リーグ』などのスポーツ情報を提供した。また、緊急時の『地震・津波情報』などを随時放送した。

Eテレでは『ニュース』を提供したほか、端末の通信機能を利用し番組ホームページへの誘導を行った。

2. BSデータ放送

BS1の独立型サービスとしては、『ニュース』『気象情報』『スポーツ情報』『円と株～経済情報～』などの定時サービスのほか、防災や生活に役立つ情報として『台風情報』『大雨情報』『地震・津波情報』を随時放送した。

BSプレミアムでは、独立型サービスとして映画の放送予定をお知らせする『プレミアムシネマ』を、また、連動型サービスとして『大河ドラマ』や『連続テレビ小説』『世界ふれあい街歩き』などを放送した。また、対象番組を見るとマイルがたまり、番組観覧や記念品などの特典に応募できる「BSマイル」、視聴した番組を自動的に記録する「BSダイアリー」の2つからなる「BSネットサービス」を行った。

〔定時番組の概要〕

(1) BS1

○独立型

- ・『ニュース』（全国）
24時間いつでも見ることのできる最新の全国ニュース。
- ・『気象情報』
「市区町村別の天気」や「週間予報」など、日常生活や防災に役立つ気象情報。

・『スポーツ情報』

プロ野球、Jリーグ、大リーグなどの途中経過・結果速報など。

・『円と株～経済情報～』

株価と為替を中心とした経済動向の速報サービス。

(2) BSプレミアム

○独立型

- ・『きょうのイチオシ!』
BSプレミアムのおすすめ番組を紹介
- ・『プレミアムシネマ』
BSプレミアムで放送予定の映画を紹介

○連動型

- ・『世界ふれあい街歩き』『にっぽん縦断こころ旅』

Ⅲ. 字幕放送

テレビ音声を文字で表示する「字幕放送」などの補完放送を実施している。

字幕放送は、07年秋に総務省が策定した「視聴覚障害者向け放送普及行政の指針」(08～17年度・以下“新指針”とする)の趣旨を踏まえ、NHK独自の「字幕放送拡充計画」を基に、計画的かつ段階的に拡充を図っている。公共放送の重要な役割として、バリアフリー放送＝“人にやさしい放送”の充実を図り、情報保障の推進に積極的に取り組んでいる。

16年度は、総合、Eテレ、BS1、BSプレミアムを合わせて、313番組・週347時間26分(定時番組・4月期改定)に字幕を付与した。

各波の週平均の放送時間は以下のとおり。

| | |
|---------|-------------------|
| 総合 | 131時間37分 |
| | (対15年度比較 +7時間56分) |
| Eテレ | 97時間27分 |
| | (対15年度比較 +8時間55分) |
| BS1 | 14時間52分 |
| | (対15年度比較 +1時間24分) |
| BSプレミアム | 103時間30分 |
| | (対15年度比較 +9時間28分) |

定時番組以外では、完プロ(収録)番組は夏、冬の特集編成、祝日編成を中心に字幕放送を実施したほか、『みんなで応援!リオパラリンピック』(Eテレ、9.9～20)では、字幕と共に解説・手話を盛り込んだユニバーサル放送を実施した。

また、生字幕放送は、定時番組『ニュースチェック11』(総合、月～金)、『時論公論』(総合、月～金)を年度当初から開始した。

東日本大震災から6年関連番組では、『特集明日へ つなげよう』(総合、3.11～12)、『バスで!列車で!アッキーがゆく“復興の地”』(総合、3.11)などで生字幕放送を実施した。

スポーツ中継では、『リオデジャネイロオリンピック』(総合・Eテレ、8.6ほか)は、地上波のオリンピック放送すべてに字幕を付与し、関連の特集番組を含めた生字幕時間は、247時間29分であった。また、『リオデジャネイロパラリンピック』(総合・Eテレ、9.8ほか)でも、地上波のパラリンピック放送すべてに字幕を付与し、関連の特集番組を含めた生字幕時間は、98時間31分であった。さらに、『第98回全国高校野球選手権大会』(総合・Eテレ、8.7～21)、『第89回選抜高校野球大会』(総合・Eテレ、3.19～4.1)では、全試合

に生字幕を実施したほか、『ウィンブルドン2016』(総合、6.28ほか)、『全豪オープンテニス2017』(総合、1.16ほか)では、錦織圭選手出場試合などで生字幕を実施した。このほか、『大相撲』(6場所)、『プロ野球』(14試合)、『MLBアメリカ大リーグ』(1試合)、『Jリーグ』(7試合)、『第92回日本水泳選手権』(総合、4.4～10)、『第17回日本ゴルフツアー選手権』(BS1、6.2～3/総合、6.4～5)、『第100回日本陸上選手権』(総合、6.24～26)、『第71回国民体育大会～2016希望郷いわて国体～総合開会式』(Eテレ、10.1)、『第16回全国障害者スポーツ大会～2016希望郷いわて大会～開会式』(Eテレ、10.22)、『2016NHK杯フィギュア』(総合、11.25～27)、『第54回ラグビー日本選手権 決勝』(総合、1.29)、『第72回びわ湖毎日マラソン』(総合、3.5)などで実施した。

特集番組では、『東京2020 12時間スペシャル→2020』(総合、10.10)で生字幕を実施したほか、『いじめをノックアウトスペシャル』(Eテレ、2本)、『第67回 全国植樹祭ながの2016』(総合、6.5)、『平成28年沖縄全戦没者追悼式』(総合、6.23)、『平成28年 広島平和記念式典』(総合、8.6)、『平成28年 長崎平和祈念式典』(総合、8.9)、『第16回 わが心の大阪メロディー』(総合、12.13)、『第67回NHK紅白歌合戦』『ゆく年くる年』(総合、12.31)、『NHKのど自慢チャンピオン大会2017』(総合、3.20)などで実施した。

Ⅳ. その他の補完放送

このほかの補完放送には、音声多重を使った「ステレオ放送」「2か国語放送」「解説放送」がある。「解説放送」は主に視覚障害者のためのサービスである。

「2か国語放送」と「解説放送」は総合、Eテレ、BS1、BSプレミアムで実施した。